

デジタルメディア利用のライフストーリー研究

代表研究者	土 橋 臣 吾	法政大学 社会学部 教授
共同研究者	羽 渕 一 代	弘前大学 人文社会学部 教授
共同研究者	岩 田 考	桃山学院大学 社会学部 教授

1 研究の目的

デジタルメディアをめぐる社会科学的な議論の多くは、当初から今日に至るまで、常にその「新しさ」を捉えることに注力してきた。次々登場する新奇な情報テクノロジーが人々の情報行動やコミュニケーションをどのように変化させるのか、そしてその先に、どのような社会変容を見通すことができるのか。こうした、いわば「最新の現状とその先の近未来」に向けられた視線が、デジタルメディアをめぐるこれまでの社会科学的な議論を駆動してきたのである。これは、最近の生成 AI をめぐる議論や、TikTok や BeReal といった新興プラットフォームへの注目などを見ても明らかだろう。私たちのデジタルメディアへの視線は基本的に、今と近未来を左右するその「新しさ」に向けられている。

もちろん、この間の激しい技術変容を思い起こせば、こうした関心のあり方はごく自然なものではある。だが、ネットや携帯の本格的普及が始まった 90 年代半ばを起点とするなら、日本におけるデジタルメディア利用は、実のところ、すでに 30 年以上の歴史を持っている。つまり、今日の私たちにとって、デジタルメディアはたんに新奇な存在というだけでなく、日常生活に深く埋め込まれたごく当たり前の存在、あるいは、幾つかのライフステージを跨ぐそれなりに長い時間を共にしてきた存在なのである。そして、こうした日常的、歴史的なリアリティの理解を欠くままなら、デジタルメディアをめぐる議論は、都度目の前の「新しさ」を追うだけの短命な議論にならざるを得ないだろう。

以上のような問題意識から、本研究では、デジタルメディアと私たちの関係を、一定の歴史的な流れの中で捉えるという課題に取り組んでみたい。具体的には、個人の生活経験を幼少期に遡って聞き取るライフストーリーの手法を用いて、人々がそれぞれの生活の中で、インターネットやモバイルメディアを中心としたデジタルメディアといかに出会い、関わり、そして現在、それをいかに意味づけているのかを記録する試みである。調査方法の詳細は次節に譲るが、こうした具体的な利用史の厚みの中でデジタルメディアを捉えることで、デジタルメディアの社会的位置を中長期的視点から評価し、デジタルメディア研究の新しい方向性を掴むこと、これが本研究の目的である。

2 調査概要

以下、本稿で報告する調査結果は、電気通信普及財団の助成を受けて 2023 年度～2025 年度に実施された調査に関するものだが、本研究チームは、これに先立つ 2021 年度にも、10 人程度の予備調査的なインタビューを実施しており、その結果の概要は、土橋・浅野・岩田・辻・羽渕（2022）にまとめられている。後述するように、3 年間の助成期間には一年に 10 人程度のインタビューを行い、2021 年度の予備調査的なインタビューを含めると、現在までに、約 40 人の調査協力者へのインタビューを完了していることになる。また、助成期間終了後も、さらに調査を続ける計画であり、最終的には、50 人程度の規模のインタビュー調査のプロジェクトになる予定である。

前節でも触れた通り、今回の調査で取り組んだのは、一言でいえば、「デジタルメディアの本格的普及開始後約 30 年というタイミングでの利用者側からの振り返り」ということになる。つまり、インターネット元年とも呼ばれた 1995 年から i モードがモバイル・インターネットの先鞭をつける 1999 年までの 90 年代的な状況、フィーチャーフォン全盛の時代から、web2.0 が時代のキーワードになり、スマートフォンが登場するまでの 2000 年代的な状況、さらには、twitter、Facebook、Instagram などのサービスが出揃い、SNS 全盛の時代を迎える 2010 年代的な状況、そして、コロナ禍による巣ごもり受容によって動画ストーリーミングサービスの定着がさらに進む 2020 年代的な状況。こうした状況の変化を、テクノロジーの側からではなく、利用者の側から跡づけることである。

もちろん、この間の各種デジタルメディア利用の実態とその変化については、筆者も参加する「モバイル・

コミュニケーション研究会」による経年比較調査（松田・土橋・辻 2014, 松田・土橋・辻 2026）や、橋元良明を中心とする研究チームが5年毎に実施してきた「日本人の情報行動」調査（最新版は、橋元 2021）などによって、かなり詳細なところまで知ることができる。しかしながら、これらの調査が蓄積してきたのは基本的に質問紙調査による計量データであり、インタビュー調査などによる、人々の具体的な経験の収集や、人々の主観的なメディア意味付けの把握までがなされているわけではない。今回の調査は、その空白を埋めることも目指している。

とはいえ、デジタルメディアの利用という、一定の年齢以上であればほとんどの人が関係する事柄についての調査であるため、誰のどのようなメディア経験を収集すべきか、その方針を事前に定めることは難しい。そのため、調査プロジェクトの開始当初は、「子どもの頃からデジタルメディアと関わっている可能性の高い1980年代生まれ以降の人」を中心にするだけを決め、直接の知人、あるいは知人から紹介してもらった人に協力を依頼する形で進めた。また、調査開始当初から、デジタルメディアに関して何かしらの特別な経験をした人に限定するということはせず、ごく一般的なメディア利用の範囲で進めた。しかし、調査の進展と共に、より年長の世代や、世代を問わず、たとえば、インターネットでの活動が自らのキャリア形成の起点になった人など、特定の経験をした人への調査の必要性も感じ、そうした人へのインタビューも一部実施した。インタビュー協力者の一覧は表1に示した通りである。

実査に際しては、インタビューを行うだけでなく、「メディア利用個人史年表」（表2）の作成も行っている。これは、西暦年、年齢、学校、仕事などの基本的な項目に加え、各種ハードウェア利用の変遷、それぞれの時期によく利用したサービスや楽しんでいたコンテンツ、趣味、交友関係などを年表形式にまとめたものである。実際の作成は、サンプルを渡しインタビュー当日までに事前記入してもらうケース、インタビュー冒頭で話を聞きながら調査者側で記入を行うケース、その両方があった。いずれにせよ、インタビューはこの「年表」を見ながら、基本的には時系列でその時々記憶や印象的なエピソードを語ってもらう形で進めた。とはいえ、調査協力者の語りが常に時系列に沿うわけではないので、時系列的な整理は、都度確認しながら、「年表」に追記する形で行っている。いずれにせよ、こうした「語り+個人史年表」という形式によって、協力者の自由な語りを妨げずに、時系列的な正確性もある程度確保することが可能になっている。

表1：調査協力者一覧

協力者	生年	性別	居住地	職業	協力者	生年	性別	居住地	職業
A	1971生	男	埼玉県	会社員	P	1994生	男	東京都	会社員
B	1971生	男	東京都	会社員	Q	1994生	男	東京都	会社員
C	1981生	男	京都府	会社員	R	1994生	男	東京都	会社員
D	1982生	女	東京都	教員	S	1995生	男	神奈川県	会社員
E	1987生	男	東京都	会社員	T	1995生	男	東京都	会社員
F	1988年	男	青森県	専門職	U	1998生	男	大阪府	アルバイト
G	1989生	男	埼玉県	会社員	V	1999生	男	青森県	公務員
H	1990生	女	長野県	会社員	W	1999生	男	埼玉県	会社員
I	1990生	女	東京都	団体職員	X	1999生	女	埼玉県	専業主婦
J	1990生	男	福岡県	会社員	Y	1999生	女	茨城県	大学院生
K	1991生	男	埼玉県	大学講師	Z	1999年	女	青森県	公務員
L	1991生	女	埼玉県	会社員	AA	2000生	男	東京都	大学生
M	1991生	男	青森県	専門学校生	AB	2001生	男	東京都	大学生
N	1991年	男	青森県	団体職員	AC	2002生	男	大阪府	会社員
O	1992生	男	福岡県	会社員	AD	2003年	男	青森県	専門職

表2：メディア利用個人史年表のイメージ（サンプル用の架空の例）

（*****さん）											
西暦年	年齢	居住地	学校	仕事 (バイト含む)	部活 サークル 習い事	ケータイ・スマホ (各時期の利用機器)	パソコン (各時期の利用機器)	ゲーム 音楽プレイヤー (各時期の利用機器)	その頃の趣味や好きだったこと	その頃はまっていたコンテンツ その頃よく使っていたサービス	その頃の主な人間関係
									ex. スポーツ、ゲーム、音楽、ゲーム、アニメ、読、映画、etc.	よく使っていたコンテンツや使っていたサービスの名称など	
1982	0歳	横浜市									
1983	1歳	横浜市									
1984	2歳	横浜市									
1985	3歳	横浜市									
1986	4歳	横浜市									
1987	5歳	横浜市									
1988	6歳	世田谷区	小学校								学校の友達
1989	7歳	世田谷区					ワープロ専用機があった				
1990	8歳	世田谷区									
1991	9歳	世田谷区			サッカーチーム				サッカー		学校の友達＋サッカーの友達
1992	10歳	世田谷区						スーパーファミ	漫画	ジャンプ、その他漫画	
1993	11歳	世田谷区									
1994	12歳	世田谷区									
1995	13歳	世田谷区	中学校		サッカー部			CDウォークマン		月9などのテレビドラマ、流行りのJPOP	部活の友達
1996	14歳	世田谷区									
1997	15歳	世田谷区					家にパソコン導入（家庭内用）	プレイステ	音楽	洋楽（ロック）、パソコンに付いていたゲーム	高校の友達、他校の友達が増える
1998	16歳	世田谷区	高校		なし（帰宅部）	携帯電話（AU）					
1999	17歳	世田谷区									
2000	18歳	世田谷区									
2001	19歳	世田谷区	大学	コンビニ	広告研究会	この辺りで機種変した	自分のノートPC		フェス参加	フェスに「初夢演」、以降2代は毎年何かがしらべ	高校時代の友人が引き続き中心ー現在
2002	20歳	世田谷区		映画館			家のネットがADSLになる				大学サークルの関係が強くなるー今も続く
2003	21歳	世田谷区		居酒屋							
2004	22歳	世田谷区								mixiに登録、フェス関連のサイト（BBS）	フェス友が増えるがすぐ疎遠に
2005	23歳	世田谷区	就職	メーカー		infobar	macbook	iPod			
2006	24歳	世田谷区					一人暮らしで復（二回BC購		サッカー観戦		同業他社の友人という情報交換相手
2007	25歳	新宿区									
2008	26歳	新宿区									
2009	27歳	新宿区	転職	同業他社		iPhone				ツイッターを始めるー今も使っている	
2010	28歳	新宿区							このころからあまり行かなくなる	スマホゲーム、ニュースアプリ	
2011	29歳	新宿区					MacBookAir購入			LINE利用開始ー今も	
2012	30歳	新宿区					アンドロイド（機種変した）				結婚、友達と遊ぶ機会は減少
2013	31歳	千葉市									
2014	32歳	千葉市								FB、インスタなど、アカウント作っただけ。	子供が生まれ、家族中心の生活へ
2015	33歳	千葉市				iPhoneに戻る					
2016	34歳	千葉市					再びimacに戻る		仕事で家庭忙しく、ちょっと離れる		
2017	35歳	千葉市									
2018	36歳	千葉市									
2019	37歳	千葉市									
2020	38歳	千葉市									
2021	39歳	千葉市							等等時々読		

以上を踏まえて、以下では、紙幅の許す限りで調査結果を概観していきたい。あらかじめ断っておくならば、今回の30人のデジタルメディアをめぐる経験は、当然ながら、それぞれに多様であり、容易に分類できるようなものではない。ゆえに、調査結果の報告も、本来は、一人一人の経験をそれぞれ個別に追っていくような形が望ましい。だが、紙幅の都合上そうした記述は困難なので、以下本報告では、特に、インターネットというメディアの利用の展開に焦点を当てて、調査の中で明確に現れたいくつかのパターンを概観することにしたい。調査全体のごく一部ではあるが、そこには、新たに生活に導入されたメディアの意味が利用の展開の中でいかに変化するのか、またそれがどのように経験されるのか、その一端が分かりやすく現れるからである。尚、以下で引用するインタビューの記録には、一部、予備調査段階でのインタビュー記録も含まれている。

3 「別の場所」としてのインターネット

まず、ひとつ目のパターンは、インターネット利用の初期に、日常生活とは切断された領域としてインターネットを経験した人のパターンである。これは、インターネット利用の初期段階でパソコン経由でのネット利用に深く関与した人たちによく見られ、そこではインターネットがリアルな日常生活とは異なる「別の場所」として経験されていく。その内実は文字通り多様だが、まずは、そうしたインターネットの別の場所性を、もっとも端的に語ってくれているインタビュー記録を見ておこう。当時のインターネットが、今日のインターネット、すなわち、オンラインとオフラインが地続きになっているインターネットとは、かなり異なる感覚で経験されていたことが伝わってくる。

すごい、よく分かんないけどすごいって思ってたんですね、やっぱり。そのインパクトがやっぱり大きくて。結局、（IT系企業への）就活もその頃のインパクトのまま走っただけなんで。「インターネットすごいな」はその頃からずっとですね。特に常時接続じゃなかったんで、時間を区切ってちょつとしか

見れない世界っていうのが逆に。

——今振り返るに何が楽しかったんだと思いますか？

自分の、この年（齢）って、結局小学校行ってみる範囲って、公園で遊んで、のレベルじゃないですか。っていう、自分の人生で見る範囲じゃないものにたどり着ける可能性があったのが面白かった。衝撃的ではありましたがね。

（1988 年生まれの男性協力者の小学生時代の記憶 ※予備調査）

今では聞くことの少なくなった、リアルとバーチャルの対立図式がまだそれなりに有効だった時代の記憶だが、では、こうした「別の場所」としてのインターネットにおいて、彼ら彼女らは具体的にどのような経験をしていたのだろうか。上述の通り、その内実は多様だが、たとえば、以下のような発言を見ると、それはたんにリアルに対するバーチャルという意味で「別の場所」だったのではなく、むしろ文化的な意味での「別の場所」だったように思われる。より具体的に言うなら、インターネットは、そこにいけば家族や学校、あるいはマスメディアといった、すでに見知った世界にはない文化に触れられるという意味で「別の場所」だったのであり、その意味で、日常的な生活世界だけでは満たされない好奇心や感情や憧れの受け皿として機能していた。

何かテキストサイト（注）見てたんで、やっぱ憧れるみたいな感じですね。こんな面白いこと言いたい、みたいな。憧れですね、完全に。面白い文章書いたり、世相を斬ったり、みたいな、自分がやってみたい、みたいな。

——ちょっと年上の人たちのカルチャーを年下側から見て、面白そうだなって？

そうです。だって、当時、多分、テキストサイトとかやっていた人たちって、今の 40 代半ばぐらいの人たちはずなんで、多分、10 個ぐらい上の人たちがいたと思いますね。圧倒的にガキだったから、ばれないようにしなきゃみたいな感じで、ずっと。

（1989 年生まれの G さんの中学時代の記憶）

（注）テキストサイトとは、1990 年代末から 2000 年代前半に全盛期を迎えた、ほぼテキストのみで構成される個人ウェブサイトのこと。面白ネタ的な日記や、風刺を含んだ文章群が人気を博し、独自のサブカルチャーを生み出した。

海外のアイドルって言えばいいのかな、バックストリートボーイズとか、そういうのがはやってたときあったじゃないですか。で、テレビだとそれにアクセスできないから、ダイヤル回線で画像を見たりとか、BBS に入って、その情報を知るみたいなのをした気がします。

——じゃあ、何ていうんだろう、結構、外の情報を取りに行くみたいな感じで。

そうですね。限られた情報しか身の回りだとなかったからって感じかな。で、その、そうそう学校のお友達はみんなジャニーズとか、そういうのが好きな子たちが多かったんですけど。あんまり私はそれ好きじゃなかったんで、外に交流を求めていったみたいなのはあるかなと思います。

（1988 年生まれの中学時代の記憶 ※予備調査）

いずれも、子供時代の経験ではあるが、それでもそこには、自分の周囲にごく普通にある文化では満足できない人が、文化的な「別の場所」としてのインターネットに居場所を見つけ、傾倒していった様子を見てとれる。当時も今も、インターネットが、身の周りでは見つけることのできない「同好の士」とつながれる場であることに変わりはないが、そうした環境があらかじめの前提になっている世代と、そうした環境をほとんど初めて手に入れた世代では、おそらく微妙に感覚が異なる。推薦アルゴリズムによって、見るべきコンテンツからフォローすべきアカウントまでが、自動的に向こうからやってくる今日の環境は、便利ではあるものの、「自分で発見した」という感覚や、そこが「自分の居場所」であるという意識は生まれにくいように思われる。それに対して、当時のインターネットは一定程度そうした感覚や意識を喚起する場だったのであるだろう。

この点に関しては、今回のインタビューでこの世代（1990 年前後生まれ）の調査協力者の語りの中に何度か登場した、「学校にうまく適応できなかった時期に、インターネットという場が救いになった」というエピソード

ソードを見るとより明確なイメージが得られる。もちろん、この世代の共通体験と呼べるような普遍性がそこにあるわけではまったくないし、ある意味では、当時のインターネットとその利用者への過剰な意味づけを引き起こす可能性のあるエピソードなので、慎重に扱われるべき語りではある。だがそれでも、当時の「別の場所」としてのインターネットが、若い利用者の生活のなかで実際に果たしたポジティブな役割としては、やはり重要なものだろう。

友達は普通にいたんですけど、そんなクラスの雰囲気になじむような感じじゃなかったんで、だからこそ、ネットカルチャーのところに救われてみたいなところはありませんでしたね。より敵対視というか、メインとサブの構造、線引きをしっかりと。何かサブカルチャーというか、のほうが自分の居場所があるな、みたいなものを自意識として持ってやってたかもしれないです。

———そうするとメインっていうのは学校カルチャーで。

そうですね、学校カルチャー。あとは学校のクラスメートが好きなものとか、当時はやってたものとかは、メインに分類してたかもしれないです。

(1994 年生まれの Q さんの高校時代の記憶)

そうですね。完全に別の世界だと思ってました。中学の時、別にそうでもなかったですけど、高校の時、あんまり学校に友達多くなかったんです。あんまり、どうしても馬が合わなくて。でなんか、学校の友達と遊ぶとかも、ほとんどなかった。ゼロじゃないけど、ほとんどなかったんです。っていうのがあって。だから、僕はインターネットのほうが友達、多かったです、当時は。(…) だから、当時は多分、自分としては認めたくなかったとは思いますが、逃避先としてのっていう側面もあったんじゃないかなとは思いますが。

(1994 年生まれの J さんの高校時代の記憶)

すでに何度か留保しているように、こうした学校文化との対比も含めて、「別の場所」としてのインターネットの体験には多様なものがあり、当然ながら、一枚岩ではまったくない。しかしながら、それをどう評価するかは別にしても、利用の初期段階で、「別の場所」としてのインターネットを経験した人においては、その頃のインターネットが、いわばインターネットというメディアの主観的な意味づけの基準になる傾向はある。以下は、インタビューの終盤で、自身の利用史のなかで、どの時期のインターネットがもっとも印象に残っているかを尋ねたときの Q さんと G さんの答えである。

———年表をあらためて俯瞰でみて、インターネットを中心に、一番自分の人生で印象に残っている時期というと、いつの時期になりますか。

初めて自分専用のパソコンをもらった 13 歳、14 歳ぐらいが。インターネット検索もそうですし、YouTube とか、そういうディグって、掘り込んで体験っていうのが、ここら辺から始まったなと思って。これで自分の趣味とか興味が、好奇心とかがすごく高まっていったというか。その時代があつての今だになっていうのは感じますね。

(Q さん 1994 年生まれ)

(どちらが) 好き (か) で言うと、やっぱ、まだ 2 ちゃんとかやってた時のほうが好きだったと思いますね。mixi、SNS 以降は、どっちかっていうとリアルなんですよ。何か本当、日常の人間関係の延長になってくるので、それこそ前半にあった、世の中に干渉できる感じとか、アンダーグラウンドな感覚みたいなのがなくなってくで、ツールですよ、本当に。それこそリアルな友達との連絡手段とか、最近の様子を見る、みたいな感じになって。

(G さん 1989 年生まれ)

一点補足しておく、Q さんは上のように語りつつも、インターネットと自分自身の関係については現在の方が「幸福度が高い」と評価しており、その他の協力者についても、単純にかつてのインターネットを高く評価するわけではない。だが、G さんがかなり明確に語っているように、かつて「別の場所」であったインターネットに「リアル」が重なってくることに関しては、多くのインフォマントが大きな変化として受け

止めており、そこに何かしらの「喪失」を見て取る人も多い。これまでの議論から明らかなように、そこで失われたと感じられているのは、日常生活の文脈から切れているがゆえに得られる自由や、未知の何かと出会うことへの期待感のようなものであり、その良さを懐かしむ語りは頻繁に見られた。もちろん、それを過剰に理想化する必要はないが、利用者にとってインターネットの意味の変化としては、かなり大きなものだったことは間違いないだろう。

4 携帯電話で始まるインターネット利用

次に見ておきたいのは、インターネットの利用がパソコンではなく携帯電話で始まり、その後も携帯電話中心に利用が展開していくパターンである。ただし、これは必ずしも、パソコンの利用経験がまったくないまま、携帯電話の利用が始まるというケースだけではない。そのようなケースもあるが、今回の調査でむしろ多く見られたのは、家族共用のパソコンが家庭にあったものの、本人がそれにさほど関心を持たず、パソコンでのインターネット利用がさほど深化しなかった、というパターンである。別稿でも論じたことがあるが（土橋 2022）、2000 年代初頭の日本の家庭において、パソコンは個室よりもリビングに置かれることが多く、インターネットも家族の集まる場でのライトユースに留まることが多かった。典型的には、たとえば以下のようなケースである。

（パソコンの利用は）しょうもないゲーム以外してなくて。でも、何か検索をするとかそれぐらいだったと思います。

——それはブラウザ、インターネットで何か検索する。

そうですね。（同席していた夫に向かって）インターネットで確かできたよね。インターネットで検索ってできたよね。やってたと思います。

——なるほど。それは一応、所有権としてはお父さんのパソコン。

そうですね。父親のパソコンです。

——それってどこに置いてありましたか。

台所に置いてました、うちは。（…）だから、使ってるのは父親と、私がゲームする。姉もちょっとゲームしてたかな。ぐらいです。

——基本的にはライトユースというか、ちょこちょこ使う感じですか。

全然。たまに使うぐらい。使用頻度はかなり低かったと思います。

（1991 年生まれの L さんの中学時代の記憶）

同様のケースは他にも多く見られたが、こうした場合は、パソコンでのインターネット利用をほとんど経験しないまま、携帯電話を手になることになる。ゆえに、インターネットというメディアが、前節で見たパソコン＋インターネットの組み合わせとは、まったく異なる文脈で生活に入ってくることになる。端的に言えばそれは、友達や家族とのコミュニケーション・ツールとしてのインターネットであり、前節で見た「別の場所」としてのインターネットとは、対照的なインターネットのあり方だと言えるだろう。前者が、既存の生活文脈から離れ、「ここではないどこか」へ向かうためのインターネットだとすれば、こちらは、あらかじめ既存の生活文脈、より具体的に言うなら既存の人間関係に埋め込まれた形でインターネットが導入されるのである。

具体例をいくつか見ておきたい。まずは、インターネットではなく、端末、機器としての携帯電話との出会いに関する語りである。いずれも、はじめての携帯電話（L さんはガラケー、X さんはスマホ）を手に入れたときの思い出を語ってくれたものだが、携帯電話を持っている、持っていないという事柄に関して、学校での友人関係がはじめからかなり強く意識されていることが分かる。

初めて携帯を買ってもらった時はすごくうれしかったのを覚えていて、色とかはなんとなく。エメラルドグリーンの確か携帯だったんですけど、その色は覚えてますね。あとは、友だちと連絡ができるようになったのでうれしかったっていうのもありますし、あとは、なんか取り残されてるっていう気持ちが多少あったので。仲間はずれ、携帯持っていないと仲間はずれになっちゃうみたいな気持ちが確かあったので、ちょっと安心したという気持ちもあった。

(1991 年生まれの L さんの中学時代の記憶)

でも、やっとみんなに追いついたっていう感じはあります。

———持ってるみんなに追いついたっていう。

中学 3 年の段階で、もうスマホを持ってる子たちもいたので、自分はその中で、ちゃんと高校が決まってるからっていう約束があったから、ずっと待ってたって感じです。

———そうすると最初のスマートフォンが、単に新しい機械を手に入れたというよりかは、自分の目標達成の象徴みたいな。

そうです。受験が、合格発表が出て、やっともらえて、高校入学ちょっと前ぐらいにもらえて、友達と連絡先を交換してっていう感じでしたね。

(1999 年生まれの X さんの中学時代の記憶)

このように見るならば、インターネットをパソコンで使い始めるか、携帯電話で使い始めるかの違いは、端末がモバイルであるか否かという技術的な違いに還元できない側面を含んでいることがわかる。つまり、上の例に見られるように、携帯電話はパソコンよりも、それを使うことの意味があらかじめ既存の人間関係という文脈の中に埋め込まれていることが多く、それゆえ、以下で見るように、携帯電話電話で始まるインターネットもやはり、そうした既存の人間関係の中で展開していくことになる。つまり、インターネットという同じメディアが、少なくともその利用の最初の段階では、前節で見た「別の場所」としてのインターネットとは、ほとんど正反対の世界として意味づけられていくのである。

たとえば、以下の二つは、前節で紹介した G さんの状況認識、すなわち、かつて「別の場所」であったインターネットが、次第に「日常の人間関係の延長になってくる」と表現した G さんの状況認識を、反対側、すなわち、インターネットを最初から現実世界の人間関係の中で使い始めた人たちの側から語ったものと見ることができる。いずれも、はじめから携帯電話でネット利用を始めた人の語りである。

———Twitter はとりあえずやったっていう感じ？それともやってみたら面白くて？

最初のうちは結構、面白くて、多分、毎日のように何か上げてたと思います。周りも結構やってたんで。(…)

———そうすると、Twitter でつながるのは学校や部活の実際に知ってる人が多かった？

そうです。(知ってる人) だけで、知らない人は。それだけです。

(1999 年生まれの W さんの高校時代の記憶)

———mixi は、どういう人とつながってたんですか

学校の友達です。基本的には。

(…)

あと何か mixi で作られてるやっぱ仲いいグループとか形成されたりするんで、そこに入るかどうかみたいな、確か何かあったような気がするとか思ったり。前略プロフの時もそれは思いました、確か。

———学校とかの仲良しグループがあって、みたいな？

そうです。何かその前略プロフが確か、何か仲いい人を紹介して、その人のリンクを貼ってみたい、そういうのが確かあった気がするんです。そこに入ったら何かちょっとうれしいし、みたいな。仲間っぽい感じがあって、みたいな。入ってないってなると、何かちょっと寂しいなみたいな感じの。

(1994 年生まれの R さんの中学時代の記憶)

そして、こうした既存の人間関係への意識は、携帯電話やインターネットをむしろ使わないという選択に結びつくこともある。たとえば、次の事例は、学校の人間関係の一部から距離をおくために、LINE の利用を控えたいと思い、結果的に携帯電話の利用も先延ばしにするという選択をした人のケースである。もちろん、こうしたケースは頻出するわけでも、典型的なわけでもないが、携帯電話、インターネット（このケースでは LINE）が、どのような存在として、意味づけ、位置づけられていたかを如実に示していると言えるだろう。

———携帯が欲しいっていうのは、当時ありましたか？

携帯は正直なところ、少しはあったんですけど、ただ携帯をやると、当時、LINE が始まった時期で、中学生、スマホを持ってる子だったり、あと、wifi をつなげば iPod touch で使えた時期だったので、ほんとにみんな、いわゆるスクールカーストの一軍だったり、やんちゃ系な男子たちがみんな（LINE を）やってて、その人間関係に巻き込まれるのがちょっと怖かったので…

（1999 年生まれの Y さんの中学時代の記憶）

以上が、携帯電話で始まるインターネット利用のいくつかの事例ということになるが、その後のそれぞれの利用の展開は、やはり多様という他になく、要約することは容易ではない。だが、それを踏まえた上で、もっともよく語られたパターンをひとつあげるならば、モバイル・インターネットを介したコンテンツ消費の拡大だろう。つまり、ここでみてきたように、当初は、友人・知人とのコミュニケーションのツールとしての意味合いの強かったモバイル・インターネットが、そうした役割を引き続き果たしつつも、各種コンテンツの消費の場としての意味を強めていくのである。

何かインターネットでの消費が、年齢を重ねるごとに強くなってきたなっていうのは感じてます。あんまり、できることが何か当時はやっぱ少なかったんで、普通に使う頻度もそんな多くなかったんですけど。今、サブスクがやっぱり増えてきてるので、年齢を重ねるごとにやっぱそこに、サブスク加入すると使わなきゃいけないじゃないですか。お金も払ってるので。

———そうですね。

なんで、その消費が増えてきて、結構インターネット中心の生活に変わってきたなっていう感じです。あと、何か友達とかは、今はもちろんいるんですけど、やっぱ遊ぶ機会も減ってきてるんで、そうなってくるとコンテンツ消費のほうに時間を費やしてるなって考えになってくるので。

（R さん 1994 年生まれ）

ここで語られている通り、こうした変化は、ひとつには本人のライフステージの変化によるもの（友人との交流の減少）でもあるが、やはりサブスクリプションを中心とするコンテンツ系のサービスの充実が大きい。だとすれば、今回は中学生・高校生の年代へのインタビューは実施できていないが、現在のその世代は、「はじめから携帯（スマホ）」であるだけでなく、「はじめからコンテンツ消費中心」でインターネットに触れている可能性も高い。この点については、若年層にとっての SNS が、コミュニケーション目的というよりもむしろ情報入手手段となっていることを明らかにした、NHK 放送文化研究所の調査なども傍証になる（渡辺 2019）。もちろん、仮に今後調査対象の年齢層を広げるとしても、利用歴の短い若い世代へのインタビューの方法は今回の調査とはまた異なるものにならざるを得ないが、どのような形を取るにせよ、各世代にとっての「はじめてのインターネット」がどのような存在だったかは、引き続き興味深い調査テーマになるように思われる。

5 今後の展望

以上、本報告では、「別の場所」として経験されたインターネットと、既存の人間関係の中に埋め込まれる形で始まるインターネットを対比しながら、人々がデジタルメディアとどのように関わってきたのか、その一端を見てきた。冒頭でも触れた通り、本報告で紹介したのはインタビュー調査全体のごく一部であり、30 人のデジタルメディア利用の個人史の中には、さらに多くの論点が含まれている。したがって、本研究チームとしては、既発表論文ですでに取り組んでいるように、いくつかの個別の論点を設定しつつ、数名のインフォマントの経験をより詳細に描いていくような論考をさらに準備していきたい。これが、本研究の当面の課題であり、冒頭で触れた、今後計画されているさらなる調査の実施も含めて、現時点で本研究に残された課題は多い。

とはいえ、本報告でも示した通り、今回の報告で主に扱ったインターネットであれ、他の何であれ、「特定のメディアの意味や価値は、それぞれの利用者がどのような時代に、どのような生活状況のなかでそれと出会ったのかによって大きく変わる」という視点は、今後も維持できるように思われる。そしてデジタルメディアの利用をその個人史の中で聞き取っていく本調査の最大の意義もそこにあると言えるだろう。それは一言でいえば、目の前に展開している最新の状況を、いかなるプロセスを経てそこに至ったのかという観点か

ら捉え返すことであり、それによって、最新の状況から目を逸らすことなく、それを歴史的に考えることが可能になる。こうした課題をあらためて意識しつつ、今後も、さらなる分析、調査に取り組んでいきたい。

【参考文献】

- 土橋臣吾, 2026, 「『別の場所』としてのインターネットの記憶: デジタルメディア利用の個人史を聞き取る」『社会志林』72(4): 111-125.
- 土橋臣吾・浅野智彦・岩田考・辻泉・羽渕一代, 2021, 「デジタルメディア利用に関するライフヒストリー分析の試み」『地域未来創生センタージャーナル』第8号: 21-33.
- 橋元良明編, 2021, 『日本人の情報行動 2020』東京大学出版会.
- 松田美佐・土橋臣吾・辻泉編, 2014, 『ケータイの 2000 年代: 成熟するモバイル社会』東京大学出版会.
- 松田美佐・土橋臣吾・辻泉編, 2026, 『つながりの「曲がり角」: データで読むモバイル・コミュニケーションの変遷』新曜社.
- 渡辺洋子, 2019, 「SNS を情報ツールとして使う若者たち: 「情報メディア利用」世論調査の結果から②」『放送研究と調査』69(5): 38-56.

〈発 表 資 料〉

題 名	掲載誌・学会名等	発表年月
『別の場所』としてのインターネットの記憶: デジタルメディア利用の個人史を聞き取る	社会志林 72 巻 4 号	2026 年 3 月
つながりの格差とモバイル・コミュニケーション: 誰のどのような格差が拡大・縮小したのか	松田美佐・土橋臣吾・辻泉編, 2026, 『つながりの「曲がり角」: データで読むモバイル・コミュニケーションの変遷』新曜社.	2026 年 3 月